

「ミクロな動機」と「マクロな振舞い」 2つのリアリズムと国際システムの安定

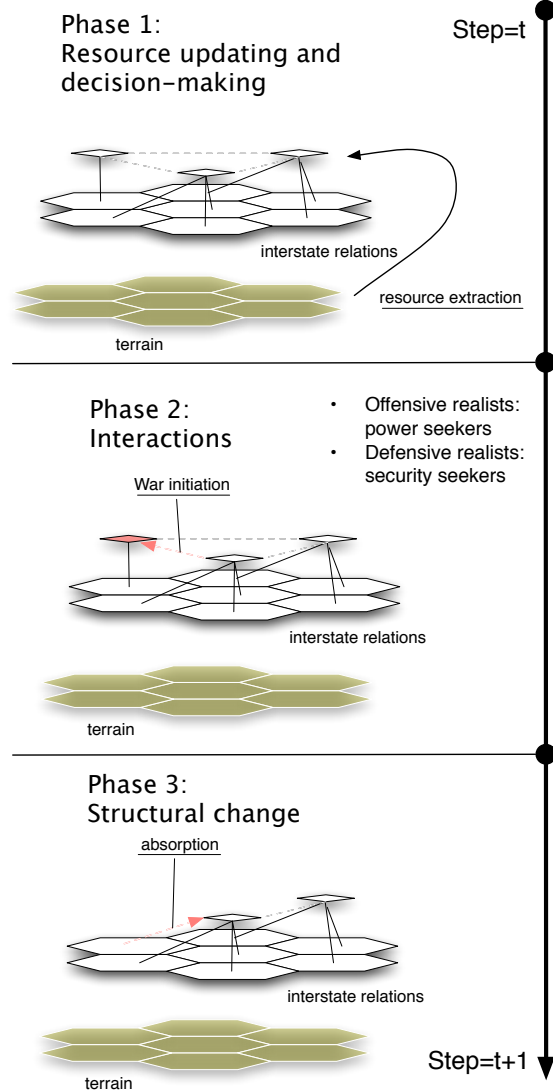
伊藤 岳
慶應義塾大学総合政策学部

本研究は、国際政治の理論がいう国家の「ミクロな動機」を積み上げたとき、国際システム全体がどのような「マクロな振舞い」を見せるかに焦点を当てる。国際政治の理論研究においては、自律的で利己的な国家から構成される国際システムは、そもそも安定的であり続けることができるのかという争点が常に問われてきた。特に伝統的なリアリズムの理論では、どのような国家の行動がシステムの持続・安定（複数の国家の併存）を促進・保証するのかというパズルを巡り、複数の学派が対立してきた。ところが、国家のミクロな動機とシステムのマクロな振舞いとの関係性を読み解く手法の不在から、このパズルは未解決のままだった。マルチ・エージェント・シミュレーション（以下、MAS）の技法は、このパズルを読み解く方途を国際政治学に提供してくれる。

本研究は MAS の技法から、理論的対立点を反映する以下の問いに取り組んだ。(1) 安全保障の最大化を目指す「防御的リアリスト」とパワーの最大化を目指す「攻撃的リアリスト」のいずれが多いときに、システムは安定するのか。(2) 国家の意思決定における誤認が小さくなるほど、システムは安定するのか。(3) パワーの均等な分布と不均等な分布のいずれがシステムを安定させるのか。

シミュレーションの結果、以下の結論及び示唆を得た。(1-a) 防御的リアリストが増加するほど、システムは安定する。(1-b) 防御的リアリズムの既述的理論の予想に反して、攻撃戦力と防御戦力の区別がつかない設定を用いても、(1-a) の傾向を確認できる。(2) 国家の意思決定における誤認の大小とシステムの安定との間には、有意な影響を確認できない。(3) パワーの分布とシステムの安定との間には、有意な影響を確認できない。

以上の示唆は、いくつかの記述的理論の主張に疑義を投げかける。未知の変数の影響（ノイズ）を完全に排除した「理論の実験室」においてさえ、いくつかの理論の主張とは相反する結果が見られたことは、これらの理論の再構成を要請している。極度に単純化された（理論には理想的な）「仮想国際システム」においてさえ説明力を持たない理論モデルが、はるかに複雑な国際政治の現実を説明できると信じる根拠は乏しい。



図表 1: シミュレーションの概要